

【184】

氏名	布 藤 昌 一 ふ とう まさ かず
学位の種類	薬 学 博 士
学位記番号	論 薬 博 第 10 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 6 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	貫 衆 の 生 薬 学 的 研 究
論文調査委員	(主 査) 教 授 木 村 康 一 教 授 富 田 真 雄 教 授 井 上 博 之

論 文 内 容 の 要 旨

貫衆に関する最古の記事は爾雅であるが、薬物としては神農本草経(25~220)から記載され、駆虫薬として使用された。その原植物は現在のオシダおよびその近縁植物であるべきであるが、図経本草(1062)以後においては原植物に混乱が起り、本草綱目(1590)になると全くオシダは忘れられ、薬効も駆虫薬から離れるにいたった。そして狗背との混同が生じて、今日の中国市場品貫衆にも混乱がみられる。

日本における最古の貫衆に関する記事は出雲風土記(733)であって、本来の貫衆がもたらされたと考えられる。原植物はオニワラビ・オオワラビなどと呼ばれていた。貝原益軒：大和本草(1709)以後では原植物は非常に混乱し、オニワラビ系統の名は現れず、現在のヤマソテツ、キジノオシダ、ヤブソテツ、シシガシラがこれに変わった。

西洋医学の伝来とともに、欧州から *Dryopteris filix mas* の根茎が駆虫薬として渡来し、宇田川椿庵はこれをオニワラビにあてた、これは現在のオシダである。そして生薬名を綿馬とした。この「綿馬」という名称は古く爾雅に現られるもので、「羊歯」のことであるといい、1種の植物を指すものでなく、シダ植物の総称である。彼は新らしく輸入された生薬にシダの根という意味でこの名をつけたものと思われる。したがって *Dryopteris filix mas* の根茎を用いる生薬を綿馬と呼ぶことは椿庵に始まることである。この名称は日本薬局方の初版にも収載され、その後、一般の成書にもオシダの生薬名として使用されるようになった。

また解剖学的な研究によって、現在貫衆の市場品として次のものが混乱して使用されていることが分った。オシダ、エゾメシダ、ハクモウイノデ、クサソテツ、ヒリュウシダ、シシガシラ、コモチシダ、ハイコモチシダ、ゼンマイ。

このうち、オシダは朝鮮、中国北部から、ヒリュウシダは中国南部から、シシガシラは日本から産出する。その他は中国の各地から産出する。

上記の各原植物のうち、駆虫薬として有効なものはオシダだけであって、オシダ以外のものは駆虫成分

を含有しない。またオシダ属の植物は、オシダ以外のものでも、オシダ亜属中のナガバノイタチシダ節、および、ホウノカワシダ亜属に属する種類以外は駆虫成分を含む。このことは分類系統との一致がみられる。また他の科、属に属するものには全く駆虫成分は認められない。

ゆえに結論として、本草の貫衆は、日本で綿馬の名を附したオシダおよび駆虫成分をもつオシダの近縁植物の地下部を用いるべきものであると断定するにいたった。

論文審査の結果の要旨

貫衆は中国の「爾雅」の積草に薬の名で載り、「神農本草経」の下品の薬として「味苦微寒、主腹中邪熱氣諸毒、殺三蟲」と記して、駆虫薬の生薬であることが知られ、その後の本草書に収載されており、今日中国の生薬（いわゆる漢薬）市場に普通に取扱われているものである。

その原植物については、和漢本草文献の中でも少なからぬ混乱が見られ、オシダ、ワラビ、キジノオ、ヤブソテツ、オニワラビ、ヤマソテツ、シシガシラ等が論ぜられ、また近代の文献による貫衆の原植物もヤブソテツ、オニヤブソテツ、オシダ、エゾメシダ、ハクモウイノデ、イヌガンソク、コモチシダ、ハイコモチシダ、シシガシラ、ゼンマイ等のシダ類が挙げられている。

また、今回の漢薬市場の生薬を調査研究したところ、下記のシダ類の根茎を用いる品を発見した。

1 *Dryopteris orassirhizoma* NAKAI オシダ（中国の東北地方および朝鮮産品、日本ではこの根茎をメンマ綿馬根と称し、駆虫生薬とする）

2 *Athyrium brevifrons* NAKAI エゾメシダ（河北、吉林、陝西、甘肅等の諸省産品）

3 *Athyrium pycnosorum* CHRIST ハクモウイノデ（エゾメシダと混じて扱われる）

4 *Matteuccia struthiopteris* TODARO クサソテツ（エゾメシダとおよそ同地方産）

5 *Blechnum orientale* LINN, ヒリュウシダ（広東省附近産品）

6 *Struthiopteris nipponica* NAKAI シシガシラ（日本から中国への輸出品）

7 *Woodwardia orientalis* SW. コモチシダ（福建、河南、湖北、江西、広東、広西、四川等諸省産）

8 *W. unigemmata* NAKAI ハイコモチシダ（同上）

9 *Osmunda japonica* THUNBG. ゼンマイ（河南、浙江省中心産品）

これ等の中でオシダを除くと、駆虫成分であるフロログルシッド系の成分を全く含有しないことを確かめ、その点からもオシダを貫衆の原植物とすることのもっとも適当であることを断定した。

オシダは漢薬とは別個に、欧州の *Dryopteris filix-mas* SCHOTT とともに、わが国ではメンマ綿馬根として条虫駆除生薬としているものであるが、これが古来の貫衆であることを本研究は判定した。

またオシダ属植物について駆虫成分を検したところ、ナガバノイタチシダ節とホウノカワシダ亜属に属するもの以外は36種のものにフロログルシッド系の化合物を含み、駆虫作用を有することを確かめた。

本論文は薬学博士の学位論文として価値あるものと認定する。